

## 6 利用の促進のための機能

構築されたシステムが、できるだけ多くの訓練関係者から大いに利用されるためには、システムそのものが技術的にも、また、環境的にも使いやすいものであることが重要となる。

### (1) DBMS (Data Base Management System) 開発段階でのニーズ反映

これは、大量に入力された各種のデータを円滑に管理運営するためのソフトであり、教材開発支援システムの中心的な存在となるべきものである。データの入力から出力までの一連のながれを一貫して管理し、システム自身の存在価値に対する“生殺与奪の鍵”を握っている。したがって、このソフトの開発を行うに当たっては、机上だけで行うことなく、各開発担当者が職業能力開発施設における教材開発の実態を初期段階で十分に調査し、利用者等の立場からみたシステムに対する意見の反映に配慮することが極めて重要となる。さもなければシステムの利用勝手が保証されず、利用者からそっぽを向かれ、後日大きなシステム変更等の不都合を生じるおそれもある。

### (2) 検索等利用方法

構築されたシステムを利用する側から見た方式の大きな違いは、コマンド方式かメニュー方式かと言ったところにある。メニュー方式は、ディスプレイ上に簡単なシステム利用上の案内を表示し、利用者がディスプレイと対話しながらマニュアル無しでも、利用できるシステムであり、コマンド方式は直にコマンドを入力することによりシステムを実行させる方式である。

当然のことながら、メニュー方式のほうが初心者には取扱いやすく、マニュアルを頼らず容易に利用することが可能である。本教材支援システムが情報関係専門家だけが利用するものではなく、大勢の指導員が利用してはじめて存在価値があることを念頭においた場合、初心者にもあまり抵抗がなくなじむことのできるメニュー方式を主体として考えるとしても、コマンド方式の効率性も期待されるため、これらを併用できることが本システムの方式に合致すると考えられる。また、ヘルプ機能の充実も図り、利用者の便宜に対する配慮が必要と考えられる。

### (3) 情報の均一化

本教材開発支援システムの中心機能は、データベース機能である。利用者がこの機能を有効に生かすためには、そのデータを長期間にわたり、同質の情報を均一に加工して蓄積する必要がある。そのためデータを多くの利用者から得て蓄積し、効率よく運営して行くためには、種類の同一な情報は、情報の提供者が変わっても情報は同じように加工されていることまたは加工できることが必要である。これがなされないと、入力者すなわちシステムの維持管理者が大きな労力を要することとなる。

このためには、今後、指導員が訓練用教材を作成するに当たり、一定のルール等に従い作成するよう時間をかけながら周知する必要があるであろう。また、これは教材作成のために部品となるべくして入力される図、シンボルの取扱い、その他関連情報等入力するもの全てについて、全く同様に考えることが必要である。

#### (4) シソーラス

情報は一度データベース化されると、印刷物とは異なり再生して見るためには、工夫が必要である。数多くの情報群から、いま必要とする一つの情報を抽出することは至難であるが、このような大量の情報に対する処理こそコンピュータに依存すべき業務である。ただし、この場合にはその機能を実現するための仕掛が必要である。

このため、キーワードの設定が鍵となるが、効率的な検索を考慮すれば、ある程度統制された言葉を使用する必要がある。このためには、これらの言葉の辞書すなわちシソーラスを準備する必要が生じる。

システムの運営側で入力するであろう教材部品となる図、シンボル等、また市販図書、技術資料等の図書教材情報については、シソーラスによりある程度まとまりのあるキーワード設定が可能となると考えられる。しかし、提供される全文型の教材についてどのようにキーワード設定を行うかは、入力に要する加工等の費用の関係から今後検討を要する。

なお、このシソーラスは意味上から階層的に言葉を分類し、重複する類似性の高い冗長な言葉を纏め、階層別分類で最上位語、中間語、最下位語及び孤立語等に分類され、既存のものとしては、日本科学技術情報センター、日本経済新聞社、ILO等から出版されているものがある。

いずれにしろ、このシステムのシソーラスを選定することについては、対象となる分野の範囲等を十分に考慮し、独自のものとするか既存のシソーラスを用いるかを判断する必要が生じる。キーワード設定についての基本的考え方は、いかに容易に検索効率をあげることに役立てるかということと、また、キーワード設定自体もできるだけ容易に行えるかということである。

シソーラスが確立されていれば、それなりにキーワード設定も容易になることが予想されるが、シソーラスの確立そのものが大変な作業であることは想像に難しくなく、今後の検討項目の大きな要素といえる。

#### (5) 分類コード

効率のよい検索を行うためには、分類コードの利用も見落とししてはならない。例えば全文型の自作教材を検索するのは、既に事業団のカリキュラムモデルに使用している分類コードがあり、これを利用することも可能であろう。ただこの場合分類を決めた後に新しい概念が生まれることがあったり、分類そのものが実情に合致しなくなるなどの問題もあることに注意を要する。

例えば、事業団のカリキュラムモデルも年度毎の新規追加コースについては、訓練内容のレベル別配列が困難となる等の問題が生じているようである。そこで旧コードに新コードを付けた場合、自動的に新コード順に旧コードが配列できる等の工夫が必要となろう。

このような問題がいくつか発生することはあるとしても、しかし、以前から使用されている、日本十進図書分類表のように根付き、今日でもその存在意義が社会一般に認められているものもあるように、しっかりした考えの基に整理されたものは有効に機能する。

いずれにしても、本システムの構築に着手する段階で使用するコード体系の検討を相応の期間と労力について十分に見込む必要がある。